

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13131

研究課題名（和文）古代ギリシアとローマにおける修辞学的伝統の相互作用の研究

研究課題名（英文）A Study on the reciprocal influences between Greek and Roman rhetorical traditions

研究代表者

吉田 俊一郎（Yoshida, Shunichiro）

東京都立大学・人文科学研究科・准教授

研究者番号：00738065

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ギリシア・ローマの修辞学的伝統の相互作用について問うものである。この2つの世界の修辞学はしばしば、統一された一つの理論体系として捉えられ、時代・地域・言語等に応じたその多様な変種が互いにかに影響しあったかの問題は見落とされがちであった。本研究は、ローマで修辞学がすでに成熟していた帝政期を中心に、これらの異なる2つの地域・言語に属していた修辞学理論の間の相互作用の通時的変遷を、両者の共通性と独自性を考察することで詳しく示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、ギリシアとローマという異なる地域・言語の修辞学の相互作用を時代を追いつつ跡づけることで、修辞学理論史の再構築に寄与したという点にある。さらに広い文脈においては本研究は、現実と乖離し硬直した理論としばしば見なされがちな修辞学が、どのように現実社会と関係しそれに対処していったかについて一つの視点を提示した。こうした視点は、社会制度一般と、そこで形成される教育体系や文芸活動とがどのように相互に関わるかを考察している点で、社会的意義を有すると考えられる。

研究成果の概要（英文）： This research investigated the mutual influence of Greek and Roman rhetorical tradition. Rhetoric in these two worlds has often been understood as a unified theoretical system and the problem of how its numerous variants according to ages, regions and languages influenced each other tended to be ignored. This research concentrated mainly on the imperial era, when Roman rhetoric had already reached its maturity, and showed precisely the diachronic change of mutual influence between rhetorical theories which belonged to these two different regions and languages by studying their common features and differences.

研究分野：西洋古典学

キーワード：西洋古典学 修辞学 ギリシア語 ラテン語

1. 研究開始当初の背景

本研究は、ギリシア・ローマの修辞学的伝統の相互作用について問うものであった。この問いの背景は以下のとおりである。ギリシア文化において、政治の中心となる議会や、法廷や、その他の社会的活動の中で大きな地位を占めていたのは弁論であった。その弁論を巧みに行うために編み出された修辞学は、紀元前 4 世紀以降次第に整備され、遅くとも紀元前 2 世紀には教育課程としての地位を確立し、ギリシア世界に広く定着した。同じ世紀の半ばに地中海のほぼ全体を支配下に置いたローマにおいてもまた法廷の中での弁論の重要性は大きく、紀元前 2 世紀の末期からギリシアの修辞学はローマに移入され、次の世紀のキケロの時代にギリシアと肩を並べるまでに至った。その後ローマ帝国の遺産として修辞学的伝統は古代・中世・近世を通じてヨーロッパの教育の根幹をなし、近代にその価値が疑われ下落した後も現代に至るまでその影響は持続し続けている。以上がまずは西洋文明における修辞学についての一般的理解といいて良いと思われる。本研究はこうした理解に全体として異を唱えるものではないものの、そこで見落とされていると思われる重大な点の解明を試みた。それはすなわち、修辞学的伝統におけるギリシア・ローマの相互作用であった。古典古代の修辞学的伝統は、西洋文明全体に対する上述のような影響力の強さが着目されるあまり、しばしば統一された 1 つの理論体系や普遍化された教育機構のように語られがちである。しかし古代世界における実態に目を向けるならば、そこには時代・地域に応じて大きな多様性が存在したことが、我々に残された資料からだけでも窺われるのである。こうした多様性は、ともすれば硬直し現実離れした空論と見なされがちな修辞学が、少なくとも一部では時代状況に応じた柔軟な変化を見せていたことを示すものである。この点に着目することは、古代における修辞学と社会との関わりを解明することにつながり、またより広く言うならば、修辞学に現れる教育制度や文芸活動と、政治体制や家族制度といった社会全体の構造との関わりを捉えることに通じるものであり、たんに修辞学の変遷を追うだけではない大きな意味があると考えられたのである。

もちろん、今までの修辞学研究がこうした点に無自覚であったわけではない。時代による社会制度の変化が修辞学理論に与えた影響は、既に注目を集めてきた。とりわけ、紀元前 4 世紀のギリシアと紀元前 1 世紀のローマに見られる、民主政・共和政から王政・帝政への政治体制の変化が修辞学の実際と理論とをどう変化させたかは、古代人自身にまで遡れるほど古い問題であるし、現在でも関心が絶えることはない。とはいえ、ギリシアとローマという地域・言語の差が修辞学理論にどう影響しているかは、時代による変化ほどには注目を集めて来なかったように思われた。ローマの修辞学が発展した紀元前 1 世紀後半以降古代末期に至るまで、両地域・言語の修辞学は相互作用を及ぼしつつも独自の変遷を遂げており、双方において中世に教科書としての地位を確立した著作の間には共通点と並び相違点も数多く見出される。ここから、これらの類似や乖離を古代におけるギリシア・ローマの地域差および地域間の交流の結果と捉えることで、古典修辞学の歴史をこの観点から描きなおすことが可能となるのではないかという発想が生まれた。このことが、ギリシアの修辞学とローマの修辞学がそれぞれの社会から受けた影響と相互に与えた影響は何であったかを問い直すという本研究の開始に至った背景である。

2. 研究の目的

本研究の最終的な目的は、「ギリシアの修辞学とローマの修辞学がそれぞれの社会から受けた影響と相互に与えた影響は何であったか」という問いに答えることであった。この大きな問いをより細かく見るならば、ギリシア・ローマの修辞学者たちの相互の影響のあり方は時代的に大きく 3 つの段階に分けられると想定された。最初の段階は、ギリシアで成立した修辞学のローマへの移入の時期である。第 2 の段階は、ローマでの修辞学の成熟に伴う、両地域の修辞学の一体化の時期である。最後の段階は、両地域の修辞学が次第に互いに乖離し、独自の発展を遂げる時期である。このうち、特に第 2・第 3 の段階においては、まだ先行研究が十分でなく、明らかにされていない問題が多数残されていた。第 2 の段階においては、両地域の修辞学者たちの学校での教育や公共の場での活動がかなりの程度共通性を持っていたことが資料から窺い知れるが、それがどのような社会的基盤に基づくものであったのかは十分に扱われてこなかった。また、この時期にそれぞれの言語で著された様々な理論書については、個別の研究は進められているものの、これらの著作は言語の相違を越えた同時代の共通の知的活動の結果として統一的に位置づけられていない。第 3 の段階については、それぞれの言語において中世以降標準的とされる教科書が形成されていった過程は研究されているが、それが互いにどの点でどう異なっているのかの比較や、そうした相違がどの時点で、どういった状況のもとで生じていったのかについてはまだ解明すべき点が多く残されていた。本研究はこうした問題に、この時代の修辞学に関連する資料の詳細な分析を通じて答えていくことにより、ギリシア・ローマの修辞学の相互作用という大きな問いに対する解答に至る道筋を見出すという目的を達成しようとした。

3. 研究の方法

本研究では、課題とする、ギリシアの修辞学とローマの修辞学がそれぞれの社会から受けた影響と相互に与えた影響の解明を、当時のラテン語およびギリシア語の修辞学文献および関連する他の資料の詳細な検討から行った。研究手法としてまず最も重視されたのは、古代ギリシア語・ラテン語文献の読解に際して常に留意すべきことではあるが、本文批評に基づくテキストの正確な理解である。これらの文献は、古代から中世に至るまでの間、書写によって伝えられてきたものであるため、その読解に当たっては、誤写や脱落といった様々なテキスト上の問題を解決する必要がある。それらの問題を扱い資料の本来あるべき姿を復元する本文批評の過程は、こうした文献に依拠する者にとって欠かせないものである。本研究の直接の目的は本文批評ではなかったものの、上記の事態を考慮して、扱う一次文献については常にこの側面を意識し、近現代の諸校訂版に付されている写本伝承についての資料（所謂 *apparatus criticus*）を活用して、本研究で使用するテキストの信頼性を検証しながら研究を進めるよう努めた。文献資料から古代の修辞学の実態を解明する本研究が確実な基盤を持つようにするためには、このような文献学的手法が必要であると考えられたためである。

このような文献学的観点からの資料の検討を踏まえた上で、本研究は、「研究の目的」の項に述べられている、ギリシア・ローマの修辞学者たちの相互の影響の3つの時代区分に沿って進められた。その枠組みの中で、ギリシア・ローマの修辞学の相互作用という大きな問いに答えることを目指して、各時代の様々な修辞学的文献が、互いの共時的・通時的関連性も考慮されながら、詳細に検討された。

4. 研究成果

上記のように本研究では、ギリシア・ローマの修辞学者たちの相互の影響のあり方の変遷が、ギリシアで成立した修辞学のローマへの移入の時期、両地域の修辞学の一体化の時期、両地域の独自の発展の時期という3段階に分けられると想定して研究を進めた。このうち最初の段階は、キケロの『発想論』と彼に帰される『ヘレンニウス宛修辞学』という、ともに紀元前80年代に書かれた著作によって良く知られているが、これらとそれ以前のギリシア修辞学との関係については広く研究が行われているため、本研究では、以後の段階を研究するための前提としての先行研究の総括に留めた。

第2の段階については、2つの点が描き出された。1つは、この時期の修辞学者たちが2つの言語・地域の枠を越えて広く活動していたさまである。このことは、紀元前後の著名な弁論家・修辞学者たちの学校や公の場での模擬弁論（架空の主題に基づいた練習や楽しみのための弁論）を集成した大セネカの著作におもに基づいている。そこには、同じ主題についてギリシア語・ラテン語双方で行なわれた弁論からの引用が集められており、互いの比較が可能だからである。またそこに登場する人々、とりわけギリシア人弁論家は、地域をまたいでローマにも来て活動しており、彼らの足跡を他の資料も援用しつつ辿っていくことで、この時代の修辞学者がローマ帝国全土を活動領域としていたことも示された。もう1つは、この時代のギリシア語・ラテン語の修辞学理論書の相互関係である。このことは、紀元前後のギリシアの修辞学者であるハリカルナッソスのディオニュシオス、紀元後1世紀末のローマの修辞学者クインティリアヌス、同時代のギリシアの修辞学の初等教科書の著者であるアイリオス・テオンなどの著作から考察され、彼らの共通性がこの段階ではある程度大きなものであったと見なしうることが示唆された。

第3の段階については、紀元後2世紀から古代末期までの間に両言語で書かれた様々な修辞学的著作における独自の発展の跡づけがおもに行われた。特に重要であったのは、紀元後2世紀～3世紀の間にギリシア語で書かれたヘルモゲネスのものとしてされる一連の理論書である。これは後のギリシア世界において修辞学の標準的教科書として大きな権威を持ったもので、ここに述べられている理論は前の時代のクインティリアヌスなどと比較して相当に革新的な点があるが、そうした点の多くは、より後代のラテン語の修辞学書には痕跡が見出されない。この著作をラテン語修辞学書と比較することで、この時期から両地域の修辞学の間に関係が生じ始めたことや、それが政治的・文化的なローマ帝国の分裂と関連していた可能性などが提示された。

最後に、本研究の開始時に設定した3つの時代ごとのギリシア・ローマ修辞学の相互の影響関係について、これまでの研究で行われた確認・考察の結果を総合し、両者の相互交流が古代後期に向かうにつれて次第に失われ、独自の発展がなされていく経過について、大きな見通しが得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉田俊一郎	4. 巻 70
2. 論文標題 竹下哲文『詩の中の宇宙 マーニールウス『アストロノミカ』の世界』Pp. xiv+251, 京都大学学術出版 会, 2021, 4000円. ISBN 9784814003150.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 88-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉田俊一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 よく語ること	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 葛西康徳、ヴァネッサ・カツアート編『古典の挑戦 古代ギリシア・ローマ研究ナビ』	6. 最初と最後の頁 379-391
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉田俊一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 キケロー『ブルトゥス』における実演actioの批評と、後代におけるその利用について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 浜本裕美・河島思朗編著『西洋古典学のアプローチ 大芝芳弘先生退職記念論集』	6. 最初と最後の頁 318-337
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉田俊一郎	4. 巻 14
2. 論文標題 古典期ラテン修辞学におけるcontroversia figurata (文彩つき模擬法廷弁論) について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フィロロギカ	6. 最初と最後の頁 36-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------